Child AFRICA マリ共和国視察レポート(2009年)

この報告書は、日本で実施された“Volvic 1ℓ for 10ℓ”の寄付金により西アフリカ・マリ共和国でユニセフが行っている「水へのアクセス改善プログラム」の視察レポートです（レポートは2009年作成当時のものです）。Child AFRICAは2010年5月にmudefが設立したのに伴い、その活動はmudefへ引き継がれました。（使用している写真はすべてVolvic 1ℓ for 10ℓ”の協力によるものです）

マリについて

Child AFRICAでは2009年4月20日から27日にかけ、西アフリカ・マリ共和国を訪問しました。

今回の訪問の目的は、日本で実施された“Volvic 1ℓ for 10ℓ”の寄付金により、ユニセフが行っている水へのアクセス改善プログラムを視察すること。その視察を通じて、今アフリカでは水にまつわるどのような問題があるのか、安全で清潔な水を手に入れられることが、子どもたちの生活にどのような影響を与えるのかについて考え、そこで感じたこと、学んだことを日本の皆さんに発信すること。その思いを胸に、日本から約28時間の道のりを経て、乾燥したマリの大地に降り立ちました。

西アフリカの内陸に位置するマリ共和国。「マリ」とは、バンバラ語でカバの意味。かつてのマリ帝国の名前にあやかってつけられました。

マリの国土の北側3分の1はサハラ砂漠の一部です。南部にはニジェール川、西部にはセネガル川が流れています。北部の砂漠地帯では降雨量が極めて少なく、一方南部では熱帯性気候で年間降雨量は700mmを超え、昼夜の温度差が大きいのが特徴です。

マリの人口は比較的気候の穏やかな中央部と南部のニジェール川流域に集中しています。日本の約3.3倍の国土に、約1,430万人が暮らすマリ(2007年、UNFPA)。全人口の約9割はイスラム教徒です。植民地の歴史の影響もあって、公用語はフランス語です。

マリは1960年にフランスから独立を果たしました。2002年に選挙で選出されたトゥーレ現大統領は、地域紛争の解決に積極的に取り組むなど、国内外で高い評価を受けています。

比較的安定しているマリの政情ですが、生活は決して豊かではありません。国連開発計画（UNDP）が算定する、その国の人の生活状況や発展度合いを見る人間開発指数（HDI）によると、マリは2008年の時点で、179か国中168位。HDIの達成が最も低い国の一つです（日本は8位）。2006年の成人識字率は22.9%、一人当たりの年間国内総生産（GDP）は1,058USDです（UNDP,2008年）。

マリの主要産業は綿花生産で、アフリカの中ではエジプトに次ぐ綿花の輸出国として知られています。その他遊牧民を中心に畜産が営まれており、現在皮革などの加工品の輸出が行われています。

マリの水事情

世界中で清潔で安全な水にアクセスできない人は8億6000万人います。適切な衛生処理施設にアクセスできない人は25億人います。不衛生な水を使ったり、衛生的なトイレなどの施設を利用できないために、下痢やコレラ、寄生虫病などが起こる可能性があり、そのため毎日4,100人もの子どもたちが命を落としていると推定されています※1（WHO/UNICEF Joint Monitoring Programme、2008年）。

こうした状況はマリでも例外ではありません。マリでは、清潔で安全な水を得ることができる人の割合は全国平均で60%です。水道が普及している都市部では86%と高いのですが、農村ではその割合は48%にとどまっています。このために、水を媒介とする下痢や寄生虫性疾患などが蔓延し、5歳未満の子どもの死亡原因の15%が下痢性の病気と言われています※2（UNICEF、2006年）。

マリの農村では、人々は水を井戸や、川、池から得ていました。井戸は昔ながらの手で掘られた井戸と、手押しのポンプがついた新型のものがあります。手押しポンプの井戸はユニセフをはじめ、清潔で安全な水の供給を目指す支援団体などが各村に普及を進めています。

農村で多く利用されている手掘りの井戸は、日本人が想像するような井戸とは少し趣が違っています。日本のもののように屋根と蓋があり、少し高く壁が積まれ、壁の壁面も石で固められている訳ではありません。昔ながらの井戸の第一印象は、「地面にあいた穴」、というものでした。井戸に覆いや蓋がないので、ごみや砂が入りやすく、また穴の周囲を壁で囲みこんでいないので、子どもや動物が落ちてしまうこともあります。実際に今回訪問した村でも、井戸に子どもが落ちてしまったり、猫が落ちてしまったために井戸が使用できなくなってしまったケースがありました。

そうしたことから、手掘りの井戸から得られる水の安全性には問題があると考えられています。実際に見せてもらったその井戸の水は白く濁っていました。井戸に覆いがないため、ゴミや砂、細菌、寄生虫が入り込んでいると考えられます。また、手掘りの井戸では通常10-15m程度の深さまでしか掘ることができないため、トイレで使われた水や、農薬などの有害物質が土を伝わって水の中に入り込んでしまうという問題があります。

地域の人たちはこの水を、ろ過したり煮沸消毒することなく使用しています。煮沸をするには薪が必要になりますが、マリではその乾燥した気候のために大きな木が育ちにくく、薪として使えるような木を探すことは難しいのです。料理をするための薪を集めることですら大変なのに、すべての飲料水を煮沸するだけの薪を集めるのはほとんど不可能だと、村の人たちは語っていました。

それに比べ、手押しポンプ付の井戸では、質が保たれた水を得ることができます。また、井戸の水源の深さは、場所によっても異なりますが、50-60mと深いため、手掘りの井戸にあるようなトイレの水や農薬などの有害物質の混入の可能性も極めて低くなります。村の人たちが汲んでくれた水の透明度はかなり高いという印象でした。

しかし、視察を進める中でいくつも目にしたのは、以前に作られたまま故障してしまっている手押しポンプの井戸でした。訪問先のサレ・アマディ村もその一つ。その村では、以前に設置された手押しポンプの井戸が故障してしまい、村の人たちはやむを得ず、手掘りの井戸から水を汲んでいました。その手掘りの井戸の水はやはり、白く濁っています。その村の村長さんの弟であるジャマラシさんに「手押しポンプの井戸を修理しないのですか？」と質問すると、こんな答えが返ってきました。「修理をしたいのはやまやまなんだけれど、修理に必要な部品は近くの市場に行っても見つけられないんだ。修理をすることができる人が近くにいるわけでもないし・・・」

水が教育へ与える影響

こうした事情から、マリの農村で清潔で安全な水を得ることは、まだまだ簡単ではありません。そしてそのことは、村に住む子どもや人々に様々な影響を与えています。

冒頭でも紹介しましたが、不衛生な水を飲んだり、生活用水として使用しているために、多くの子どもたちが下痢性の病気や寄生虫病に苦しんでいます。農村で出会ったとある姉妹は、毎日のようにお腹を壊していること、しかし薬を手に入れることができないため、腹痛を起こしてもじっと耐えているのだということを話してくれました。十分な量の水が得られないために、食事の前に手を洗う、トイレを清潔に保つといった衛生環境の確保も難しくなっています。このことがさらに下痢やその他の疾患を引き起こし、また、子どもの病気に対する抵抗力を弱めることにつながっています。

サレ・アマディ村のジャマラシさんは、「手押しポンプの井戸が使えなくなってから、村人が下痢にかかる頻度が増えたよ。他にも、結膜炎などの眼病や消化器関係の病気、皮膚疾患などが増えているんだ。」と教えてくれました。結膜炎や皮膚疾患も、身体を衛生的に保つことができないため、雑菌が入り込むことが発症の原因の一つ。水は様々な形で身体に影響を与えるのだと実感しました。

健康面以外にも、清潔で安全な水を得るのが難しいということは、社会的、経済的な影響を及ぼします。中でも子どもたちにとって大きいのは、水が教育を受けられるかどうかを左右する、ということです。

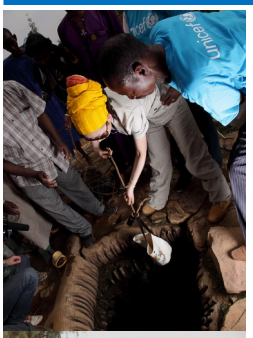
子どもが学校に通えるためには、最低限の健康状態を保っている必要があります。しかしマリの農村では清潔で安全でない水によって引き起こされる下痢などの症状のために、子どもが欠席せざるを得ないという状況が起こっています。また家族が下痢などの疾患にかかり、その世話をしなくてはならないために学校に通うことができない子どももいます。

水汲みが時間的、体力的な負担となり、学校に通うことができなくなっている子どもたちもいます。マリの農村では、大抵の場合、水汲みは女性や子どもたちの仕事です。手掘りの井戸に水を汲みに来ていた女の子に話を聞いたところ、一日に3度は水を汲みに来るのだそうです。井戸が家から遠く、またそれが手掘りの井戸である場合、相当な時間的、体力的な負担がかかります。手掘りの井戸では、数キロにもなる水を満たしたバケツを、井戸の底から腕力だけで引き揚げなくてはなりません。そしてその水の入った重いかめやバケツを頭に乗せ、家までの道のりを歩かなくてはならないのです。時には数時間を要するこの作業に体力と時間をとられることが、学校に行くことができない原因の一つになっているケースがあります。ユニセフでは、特に女子の就学率を向上させるため、学校に手押しポンプの井戸の設置を進めているそうです。

また、清潔で安全な水の獲得は、村や家庭の経済状況も左右します。マリの農村ではほとんどの人が自給自足農業に頼った生活をしています。サレ・アマディ村では、手押しポンプの井戸が設置されると決まった時、使える水の量が増えることを期待し、新たな畑を作ったそうです。マリでは乾季には降雨量が激減するため、浅い水源から水を得ている手掘りの井戸では乾季の終わりには水量が減り、時には枯れてしまうこともあります。

一方、手押しポンプの井戸は深い水源から水を取っているため、比較的安定して水が供給できることから、農作物の収穫量の増加につなげられると考えられます。また乾季の間も、家畜に水がやれなくなるという心配が減ります。このため、乾季の間にも自給自足農業によって食料が確保できること、余剰分を売ることができれば現金収入につながり、医療費や子どもの教育費が支払えるようになることなど、水の存在によって、家庭の経済状況を向上させることにつながるのです。

清潔で安全な水へのアクセスを向上のために



このように、手押しポンプの設置を進める支援を視察し、Child AFRICAが実感したことがあります。

それは、水の問題を考え、解決していこうとするとき、教育がとても重要な役割を果たすということ。清潔で安全な水の存在は子どもに教育を受けさせるために欠かせないものですが同時に、水の問題の解決には、広い意味での教育が不可欠です。2つの問題は、お互いに作用し合っているのです。

教育は大きく2つの場面で水の問題の解決に大きな役割を果たします。

まずひとつは、教育を通じ、安全で清潔な水の重要性をしっかりと人々に理解してもらうことです。それにより、不衛生な水を使うことで起こる健康への被害を食い止めることにつながります。

今回の視察で村の人々に話を聞いた際に驚いたのが、下痢や寄生虫病によって起こる腹痛を、自分たちが利用している水と結び付けて考えている人がとても少ないということでした。視察をしたある村で衝撃を受けたのが、村の人たちが利用している手掘りの井戸の中に、白い大きなナマズが泳いでいたこと。村の人が、ナマズが水の中の汚いものを食べてくれるようにと入れたのだそうです。

しかし、川のように水の循環がない場所では、ナマズのふんや細菌など、衛生的な問題があります。このように、利用している水に細菌や寄生虫が入り込んでいる可能性があることを意識していないため、病気になったとしてもその原因を突き止めることができず、そのままその水を使い続けてしまうことがあります。そうした水を利用し続け、下痢がずっと続くようになると体は衰弱し、その他の感染症などへの抵抗力も低下してしまいます。まずは清潔で安全な水とはどのようなものか、そしてそれを使って身体や身近な環境を衛生的に保つことがどのような影響を与えるかという認識を持つことが、健康を守る第一歩になります。

もう一つは、村の人たちが自分でポンプを管理し、必要があれば修繕できるよう、村民たちに対して教育や研修を徹底して行う必要があるということ。ユニセフの支援では、手押しポンプの井戸を設置したあとは、村人たちによる井戸の管理委員会を作り、ポンプの修繕も村民たちが自身で行えるようにトレーニングを受けます。そうした研修を徹底し、必要な部品をどこで手に入れられるかを把握し、自分たちの力で継続的に水を得られる能力を身につけることが重要なのだということを実感しました。

マリの「子どもにやさしい学校」の訪問

今回のマリ視察の中でも、ユニセフが提唱する「子どもにやさしい学校」や、子どもにやさしい学校を目指した取り組みを進めている学校をいくつか訪問することができました。特に今回は水の問題を中心に視察をしていたこともあり、子どもにやさしい学校が持ついくつかの側面のうちのひとつ、「子どもにとって健康的で保護的であること」という面に注目し、学校を視察してきました。

マリ中南部のモプティ地区に位置するジャンバドゥグ小学校は、「子どもにやさしい学校」のコンセプトに沿って運営されている学校です。子どもにやさしい学校とは、１、子どもの権利を実現する学校、２、学力、生きる力が身に着く学校、３、子どもが元気で健やかに育つ学校、４、子どもを守り保護する学校、５、コミュニティに根付いた学校、６、男女平等で差別のない学校、の6項目を満たした学校のことです。

そのうち、「子どもにとって健康的で保護的である」学校とは、具体的には適切な水と衛生の施設を設置し、教室において保健政策を実践することによって、健康で衛生的で安全な学習環境を確保しようとすること、そしてそこでどうすれば健康を保てるかという保健教育も行うことを指します。

ジャンバドゥグ小学校では、子どもが健康的であるために必要な設備の整備を進めています。たとえば、2008年には学校に手押しポンプの井戸が設置されました。その水はろ過して飲用水として使われたり、また各教室の水がめに運ばれ、子どもたちが手を洗うための水として使われています。農村の子どもたちにとって、学校に来れば清潔で安全な水を得られるということは、大きな安心感を与えます。また校舎の外には、男女別のトイレが少し間隔をあけて設置されています。これは特に高学年になった女児が学校に来づらくならないようにするという意味で、とても重要な配慮です。保護者の中には、娘が男児と同じトイレを使わなくてはならないから、という理由で、子どもを学校に行かせたがらない人もいるのです。

さらにジャンバドゥグ小学校では、衛生教育を徹底して進めており、身体を衛生的に保つこと、そしてそれがどうして重要なのかをきちんと生徒たちに教えています。具体的には、食事の前後やトイレのあとに、清潔で安全な水を使って手を洗う、トイレなどの水場を清潔に保つ、などです。ジャンバドゥグ小学校では、お昼になると地域の女性たちが給食を準備してくれるのですが、食べる前には子どもたちはきちんと行列を作り、順番に手を洗っていました。

またトイレのそばには水がめが置かれていて、トイレの前後には必ず手を洗うように徹底した教育が行われています。トイレは生徒たちが当番制で掃除をしており、常に清潔に保たれるよう配慮がされています。学校の生徒の皆さんに「どうしてトイレの後に手を洗うの？」と質問をしてみると、「病気にならないようにするため」と、元気な返事を返してくれました。

こうした教育が進めば、今回農村で直面したような、水に関する知識がないために起こる疾患などは減っていくことでしょう。健康を守るための、そして命を守るための教育の重要さを改めて感じました。

学校としてさまざまな面から学校の改善を行っています。またその際には、子どもが受け身になることなく、積極的に学校運営に参加することのできる仕組みが整えられています。この学校を支える制度の一つに、「子どもの自治」と呼ばれる制度があります。毎年一回、新年度に生徒たちが学校の査定をし、今学校にはどんな問題があるかを洗い出します。そこで上がった問題に応じて子どもたちが担当省庁を作り、大臣を選びます。そして年間計画を立て、問題の改善に向けて活動をしていきます。その過程で子どもたちは定期的に校長先生との意見交換をし、年度末には総合評価を行います。

今年のジャンバドゥグ学校の子ども総理大臣はカウグジャラ君。説明をする校長先生の隣で、少し照れたような、それでも誇らしげな顔をしていました。教員、保護者、地域社会、そして子どもたち自身の協働によって小学校運営が進められている姿がとても印象的でした。

マリ訪問を終えて

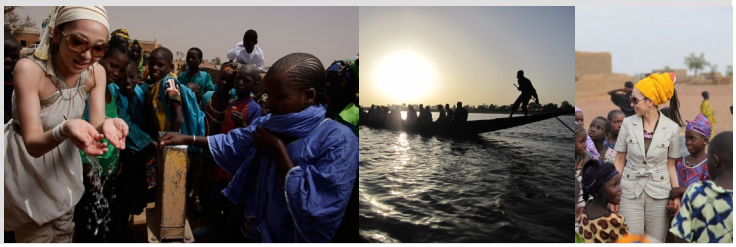
水について語ることは、生命について語ること。

今回の視察の感想を話すたび、こんな言葉が口をついて出てきました。

乾燥した大地と、伝統的な建物と、穏やかな様子の人々と暮らしぶり。マリを訪れて初めに目にしたものはそれでした。そこには極度の貧困を思わせるものはさほどなく、また土地は乾燥しているものの、大きな大地を流れる雄大なニジェール川には豊富な水がたたえられていました。しかし、その陰には、安全で清潔な水を得ることができないために命を落とす、もしくは腹痛や寄生虫病などの病気に苦しむ子どもたちがいました。

今回の視察では、水へのアクセス改善を通じた保健衛生の充実が子どもたちの生活にどのような影響を与えるかを目の当たりにすることができました。

それは子どもたちが健やかな生活を送れるようになること、そしてそれをもとに、自分の夢を追いかけられるよう、学べる環境の基礎を築くことができる、ということでした。

子どもの健康を守ること。それは子どもの可能性を伸ばすための芽を摘まないよう、予防をすることでもあります。活き活きした表情で学校に通い、自分の力で健康を保っていくすべを学ぶ子どもたちの姿はとても頼もしく映りました。彼らが大人になり、また自分の子どもたちにそのすべを伝えていってくれること。それによって、マリの次代の子どもたちはさらに健やかに、そして自分の手で未来をつかむ力を身につけていけるだろうと期待を抱かせてくれました。

安全な水源を継続的に確保することと、同時に水や衛生に関する知識を普及させていくこと。その二つを同時に行ってはじめて、子どもを含めた人々の健康は守られる。それを日本から応援するためには、まずは多くの人にそうした問題を知ってもらい、意識してもらうこと。Child AFRICAでは、今回の視察から得た学びをなるべく多くの人と共有できるよう、今後イベントや広報活動を行っていきたいと思います。